

右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章

ーハラッパー文化の多様性に関する一考察ー

小茄子川 歩

Indus Type Seals Having a Right-facing Animal Motif:
Consideration of the Diversity of Harappan Culture

Ayumu KONASUKAWA

本論は、右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章の意義を考古学的に検討したものである。まず始めに、インダス式印章の印面のデザインに着目し、それを構造化する法則性を「デザインシステム」として把握した。「モチーフを左向きに、その上方に2～5文字程度のインダス文字を陰刻する」というデザインが印面の構造を規制する約束事＝「デザインシステム A」である。次に、「デザインシステム A」に規定されない印章、すなわち右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章を抽出し、その意義を考究するために詳細な分析を行った。その結果、このタイプの印章はガッガル川流域という特定のエリアに特徴的に分布することが明らかになった。さらに、インダス文字やつまみ（鈕）の型式も左向きのモチーフが刻まれたインダス式印章のものとは異なる様相を示す＝「デザインシステム B」。結論として、「デザインシステム B」に規定される右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章は、これまで指摘されることのなかったインダス式印章の地域性または多様性を体現している可能性がある」と述べた。

さらに、本論で明らかにしたインダス式印章の地域性または多様性を評価すべく、インダス文明社会を特徴づける物質文化であるハラッパー文化の意義を検討することを試みた。本論の検討からは、ハラッパー文化は地域伝統諸文化が保持する既存の世界観に適合するという方法で、異文化間に軋轢を生むことなく中心から周辺へと浸透し、インダス文明社会を支える重要なイデオロギーの伝達装置としてその役割を果たしたのだと理解したい。ハラッパー文化に認めることのできる地域性または多様性とはこうした役割を反映した発現形であり、右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章も、こうした側面からの評価が妥当であると考えられる。

キーワード：インダス式印章、デザインシステム、インダス文明、ハラッパー文化、都市社会の文化伝統

In this paper, the author discusses the significance of Indus type seals having a right-facing animal motif on their obverse side (i.e. the animal faces left when impressed). A “Design System” model is proposed focusing on designs depicted on Indus type seals. In the majority of cases, defined as ‘Design System A’, the animal faces left along with two to five scripts or short inscriptions above the animals. However, there are a group of seals with animals facing to the right. These are mentioned for comparative analysis in order to find out their significance. It has become evident that these seals are concentrated specifically along the Ghaggar Basin in the north-west region of India. Furthermore, defined as ‘Design System B’, the seals with animals facing to the right have Indus scripts and a boss on the reverse side, both of which are different from those of the Design System A. It is suggested that this represents regional diversity within Indus type seals or the Indus civilization.

Based on this fact, the social and economic structure of Harappan culture can be considered to exhibit regional diversity in Indus type seals. Previous analysis of regional diversity suggests Harappan culture most probably experienced renewal during diffusion into peripheral areas and was adapted by regional cultures. The diffusion of Harappan culture (i.e. Indus type seals, Harappan pottery style, etc.) represented by this seal transformation was a peaceful process. In such a way, Harappan culture acted as an important transmitter of ideology within the Indus civilization. It seems likely that the seals having a right-facing animal motif can be evaluated on the strength of the role of Harappan culture discussed in this paper.

Key-words: Indus type seal, Design System, Indus civilization, Harappan culture, cultural tradition of urbanized society

はじめに

前2600～1900年頃に展開したとされるインダス文明社会は、その成立過程において都市センターや新たな交換様式に基づく交易ネットワーク、文字体系、度量衡などに代表される複雑かつ効率的な社会システムを創出した。そして、その社会システムを保持し管理する目的でさまざまな器物を考案または発明する¹⁾。そのような機能をもつ代表的な器物としては、統一された彩文様式を有するハラッパー式彩文土器 (Harappan painted ware) や本論で検討するインダス式印章 (Indus type seal or Indus seal) などを挙げることができる (上杉・小茄子川 2008; 小茄子川 2007, 2008b, 2008c)。

インダス式印章とは、印面に一角獣をはじめとする主モチーフと平均2～5文字程度のインダス文字が陰刻され、裏面に紐を通すためのつまみ (鈕) をもつ方形・押捺型のハンコ形の器物である。銀・銅製の例外を除き、ほぼ全てが凍石 (ステアタイト) 製である。出土数の約84% ($1361/1628 = 1628$ 点中 1361 点、以下も同じ。出土点数に関しては後に詳述する) は、モヘンジョダロ (Mohenjodaro) 遺跡とハラッパー (Harappa) 遺跡の二大都市遺跡に集中するが、各地域に点在する中・小規模の都市遺跡からも少数ながら万遍なく出土する。このような分布傾向と交易または交換活動に関与すると考えられる機能、そして何よりもインダス文字という文字体系を組んでいることを踏まえれば、インダス式印章はインダス文明社会の社会・経済的な構造を体現する最たる器物であると考えることができる。すなわち、インダス式印章を構成する複雑なシステムを考究することは、インダス文明社会の構造を明らかにするための重要な研究視角であると言える。

問題の所在と本論の目的 (図1、表1)

インダス式印章は、1920年代の発見当初から様々な視角で研究されてきた²⁾。特に、印面に刻まれるモチーフと文字に関する問題が活発に検討されてきたと言える。印面に刻まれたモチーフの細分と解釈 (Fairervis 1986; Joshi and Parpola 1987; Shah and Parpola 1991; Vidale 2005; 小磯 2005; 近藤 2006 など)、文字の解読 (Mahadevan 1977; Parpola 1994; Rao 1982; Zide and Zvelebil 1976 など)、裏面に認めることのできるつまみ (鈕) の型式学的検討 (野口 2002, 2003, 2005) などがその代表例である。さらに、印章の製作組織を検討した研究 (Rissman 1989) やモヘンジョダロ遺跡出土の印章を出土位置などの側面から詳細に検討した研究 (Franke-Vogt 1991) などの興味深い研究もある。しかしながら、インダス式印章を構成する各要素を総合的に検討した研究は少ない。各要素は、個別にそして

微視的な視点で検討されるのみである³⁾。

資料が蓄積されてきた現在の研究状況の中で、インダス式印章の構造を正しく理解するために微視的な研究を踏まえた上で、それとは別次元で資料を俯瞰する作業も重要であると考ええる。個別から全体への視点ではなく、全体から個別への視点である。全体的な傾向を把握することは、個別資料を理解する上でも重要であると考えたい。筆者は、これまでにインダス式印章の総合的な解釈を目的として、印面のデザインにおける厳格な法則性 (小茄子川 2007) およびに印章のサイズ (小磯・小茄子川 2009) を検討してきた。後に詳述するが、インダス式印章のデザインは厳格な法則性に基づいて決定されていることが明らかである。すなわち、印面に陰刻される主モチーフに関しては、ほぼ例外なく左向きに表現されるという約束事をもつ。

しかし、インド共和国北西部に位置する東部パンジャブ (Punjab) から北部ラージャスターン (Rajasthan)、ハリヤーナー (Haryana) 州に位置するガッガル (Ghaggar) 川流域を中心とした近年の考古学的調査の進展により、左向きではなく、右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章の存在が報告されるようになってきた (Joshi and Parpola 1987; Kumar and Dangi 2007; Rao et al. 2004, 2005, 2006; Shinde et al. 2008a, 2008b; 上杉 2008, 2009 など)。近年、発掘調査が実施されたファルマーナー (Farmana) 遺跡⁴⁾においても、左向きのモチーフが刻まれた印章とともに、右向きのモチーフが刻まれた印章とその印影 (封泥または護符) が発見されている (Shinde et al. 2008a, 2008b; 上杉 2008, 2009; 小茄子川 2009)。印影に認められるモチーフは左を向いており、印章自体には右向きのモチーフが刻まれていたことが分かる。それらの資料を実見・実測してみたところ、両タイプの印章が異なる特徴を持つことに気付かされたのである。これが本論作成の動機である。

そこで本論では、これまで検討されることのなかった厳格な法則性に規定されない印章、つまり右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章 (図2) について詳細な検討を行い、その意義を問うことにしたい。インダス式印章を構成する複雑なシステムの一側面を明らかにすることが第一の目的である。

さらに、本論において導きだされた結論を評価すべく、インダス文明社会を特徴づけるハラッパー文化の意義についても言及してみたいと思う。インダス式印章は、ハラッパー文化を代表する器物である。つまり、インダス式印章に観察することのできる諸特徴はハラッパー文化の意義を考える手掛かりともなるはずである。

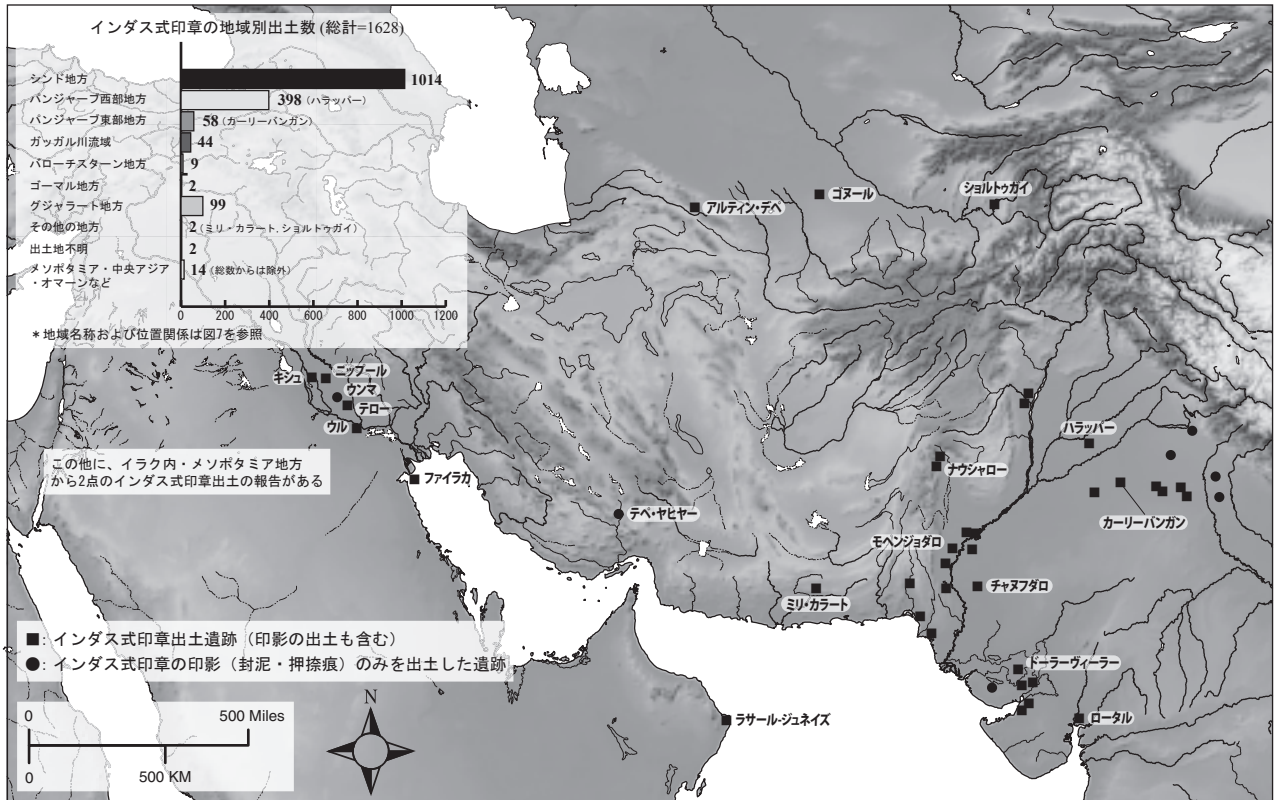


図1 インダス式印章および印影 (封泥・押捺痕) を出土した遺跡の分布

表1 編年表

メソポタミア		イラン南西部 (マクラーンを含む)	パローチスターン	インダス平原 (ガッガル川流域を含む)	インダス平原における印章の様相	
				ハラッパ 1A	インダス平原で幾何学文印章がみられる	
3000BCE	ジェムデッド・ナスル期	シャフリ・ソフタ I	メヘルガル V	【先ハラッパ文化期】		
		バンブル I・II				ハラッパ 1B
		ミリ・カラート IIIA	メヘルガル VI			【移行期】
2600BCE	初期王朝期 I	シャフリ・ソフタ II	メヘルガル VII	【ハラッパ式土器成立段階】	インダス式印章の考案／発明 デザインシステムの確立 サイズ・カテゴリーの序列化	
		バンブル III・IV	メヘルガル VIIIC			ハラッパ 2
		ミリ・カラート IIIB	メヘルガル VIIIC			チャヌフ・ダロ I a
2500BCE	初期王朝期 II	シャフリ・ソフタ III	ナウシャロー IC	【ハラッパ式土器古段階】		
		バンブル V	ナウシャロー ID			ハラッパ 3A
		ミリ・カラート IIIC				モヘンジョ・ダロ A 期
2350BCE	初期王朝期 IIIA	シャフリ・ソフタ IV(1)	ニンドーワリ	チャヌフ・ダロ I b		
				アムリー IIIA		
				ファルマーナー II		
2350BCE	初期王朝期 IIIB	ミリ・カラート IV	ナウシャロー II	【ハラッパ式土器中段階】		
				ハラッパ 3B		
				モヘンジョ・ダロ B 期		
2200BCE	アッカド期		ナウシャロー III	アムリー III B	コンベックスタイプや文字のみの印章の使用	
				【ハラッパ式土器新段階】		
				ハラッパ 3C		
2000BCE	ウル第 3 王朝期	シャフリ・ソフタ IV(0)	【クッリ文化盛期】	モヘンジョ・ダロ B 期上層	インダス式印章の消滅	
		バンブル IV		チャヌフ・ダロ I c		
			ナウシャロー IV	アムリー III C		
1800BCE	イシン・ラルサ期			ハラッパ 5	BMAC 系印章の出現	
			【BMAC 文化】			

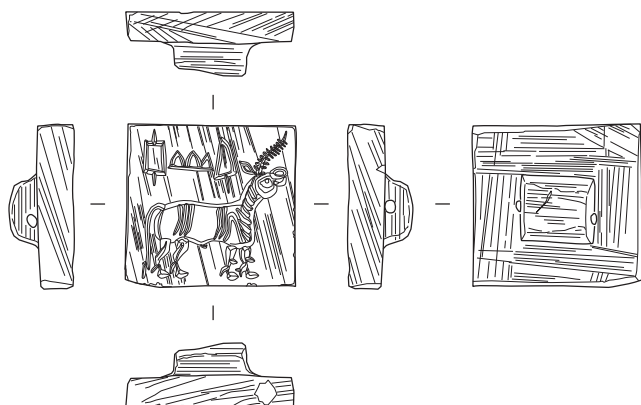


図2 右向きのモチーフが刻まれた
インダス式印章 (scale = 1 : 1)

インダス式印章のデザインシステム

本論の主題である右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章の意義を検討する前に、拙稿（小茄子川 2007）を参考にインダス式印章のデザインについて概観しておく。特に、印面のデザインに認められる厳格な法則性を中心に確認しておこう。そうすることで、右向きのモチーフが刻まれたインダス印章に固有の特徴や特殊性を明確に把握することができるからである。

1. 分析資料について

一般的にインダス式印章と称される器物には、いくつかのヴァリエーションを認めることができる。例えば、

- (i) 印面が方形で裏面に鈕をもつもの（図2）
- (ii) 方形の板状で両面が印面となっており、鈕をもたないもの
- (iii) 印面が長方形かつ断面が平凸レンズ形で鈕をもたないもの

などを挙げることができる（Joshi and Parpola 1987; Shah and Parpola 1991 に掲載の写真を参照のこと）。ただし、本論で検討するのはこれらの内、大多数を占める（i）のみであり、本論で「インダス式印章」と呼称する場合は（i）のタイプの印章を意味する⁵⁾。

出土数は、A. パルポラ（Parpola）らが中心となって作成したインドとパキスタンにおける政府考古局や博物館などが所蔵するインダス式印章を集成した2巻の図録（Joshi and Parpola 1987; Shah and Parpola 1991）⁶⁾に基づきカウントすると、印面に陰刻されるモチーフを明確に確認できる資料で1581点を数える⁷⁾。これに最近の出土資料45点とミリ・カラート（Miri Qalat）遺跡例1点（Besenval 1994; Besenval and Sanlaville 1990）、ショルトウガイ（Shortugai）遺跡例1点（Francfort 1989）を加えると総数1628点となる。ただし、本論ではモチーフの向きに注

目するため、向きに関する議論を行う際にはモチーフの向きが分からない資料（物語の場面や幾何学文などモチーフ）は除外する。その際の分析資料の総数は、1316点となる。本論で検討対象とした資料総数は、表2に一覧表として示してある。表中には、例えばモヘンジョダロ遺跡出土の一角獣の場合、「623 (454) / 616 (6)」=「正体／斜体」と記してある。これは、「モチーフが明確な資料数（サイズを計測可能な資料数）／モチーフの向きが明確な資料数（右向きのモチーフの資料数）」を意味する。さらに、「3」とのみ記してあるものは「モチーフは明確であるが、サイズ計測不可かつモチーフの向きが明確でない資料数」、「3 (3)」と記してあるものは「モチーフは明確かつサイズ計測可であるが、モチーフの向きが明確でない資料数」、「1 / 1 (0)」と記してあるものは「モチーフ明確かつモチーフの向きが明確（左向き）であるが、サイズ計測不可の資料数」をそれぞれに表している。本文中の各要素の出現頻度（%）は、この表2の数値から算出してある。

2. インダス式印章のデザイン

次に、インダス式印章の特徴について、モチーフとサイズ、配列パターン、分布傾向を中心にまとめる。

(1) モチーフ

印面に刻まれる主モチーフの種類は表2の左の欄に示したように多岐にわたるが、その大半を占めるのが単体の動物をモチーフとしたもので、実在の動物と想像上の動物とに大きく二分できる。人物の場合も同様に、日常的な人物像を表したと考えられるモチーフと角を生やした（または角飾りを被った）「有角神」と呼ばれる想像上の存在を表現したモチーフとが存在する。本論では、拙稿（小磯・小茄子川 2009）に従い、実在の動物群と有角神または人物が登場する場面を「物語の場面」として分類してある。このほか卍文や十字文、複数の円や同心円を連ねた幾何学文、建物（神殿）、船などのモチーフもある。このように印面に陰刻されるモチーフは多種多様であり、各モチーフの出土数にはそれぞれ大きな偏りがあることがインダス式印章の全体的な特徴となっている。総数全体の約61%（994/1628）を想像上の動物としての一角獣が占めており、その他は多い場合でも1～6%程度、大多数が1%未満であり、出土例が数点ないし1点のみの場合もある。出土数の多いモチーフを列挙すれば、卍文が約6%（98/1628）、短角のウシが約4.4%（71/1628）、コブウシが約2.7%（44/1628）、ゾウが約2.5%（40/1628）となる（表2の合計欄を参照）⁸⁾。

表 2 本論で分析対象としたインダス式印章の出土数一覧

		シンド地方										パンジャーブ/ハaryana地方						
		モヘンジョダロ	チャヌブダロ	コート・ディ・ザ・ジャム	アムリー	アラフ・ディ・ノ	ハラール	ジュナル	ラカンジョダロ	ロフムジョダロ	ハラハル	カリー・ハルガン	ハサー・ワリー	ファルマナー	パンジャーブ	ハラール	ラケー・ガリー	
単体	実在の動物	象のウシ	46(39)/46(0)	1(1)/1(0)							15(7)/15(0)	4(3)/4(0)						
		コブウシ	34(23)/34(0)								8(3)/8(1)	1(1)/1(0)		1/1(0)				
		その他ウシ科の動物	50(3)/41(1)					1(1)/1(1)			27(1)/24(0)	1(1)/1(1)	2(2)/2(2)		1/1(0)			
		スイキエウ	10(7)/9(0)								2/2(0)	1(1)/1(0)	1(1)/1(1)	1(1)/1(1)	1(1)/1(1)			
		ヤギ	5(4)/4(2)								4(3)/4(1)	7(7)/7(6)			1(1)/1(1)			
		サイ	14(7)/13(2)				1(1)/1(0)				1(1)/1(0)	1(1)/1(0)	2(1)/2(2)					
		ソウ	31(20)/31(0)						1/1(0)		7(5)/7(0)	1(1)/1(1)						
		トラ	11(7)/11(0)	1/1(0)							2(1)/2(0)	1/1(1)						
		ノウサギ	2(2)/2(0)															
		ト																
物語の場面	想像上の動物	一角獣	623(454)/616(6)	19(16)/19(1)	1/1(0)		5(4)/5(0)	4(3)/4(0)	1(1)/1(0)	2(1)/2(0)	24(138)/24(2)	27(21)/26(6)	3(3)/3(2)	2(2)/2(1)	2(2)/2(1)	1(1)/1(0)	1(1)/1(0)	
		複頭獣	7(7)/5(2)	1		1(1)/1(1)						2(1)/2(1)			1(1)/1(1)			
		複合獣	13(11)/13(0)								4(1)/4(0)							
		動物	1(1)															
		斜に描かれた動物		1(1)														
		スタンプ(誰か?)									1(1)							
		起									1(1)							
		実在の動物(動物群)	1															
		有首神/人物が登場する場面	15(12)	2(1)								1	4(2)	1(1)		1(1)		
		文字のみ	文字のみ	社文	46(31)								44(26)					
同心中・内文	2(2)										2(2)	2(2)	1(1)			1(1)		
十文字	7(7)										10(6)							
その他	4(4)										6(5)		1(1)			2(2)		
文字のみ	15(9)			3(3)			1(1)				5(4)	5(2)	1(1)					
未製品	破片(モチーフ不明)	26	3			1/1(1)				19	3	3/3(2)		3	1			
	合計	963(650)/825(16)	31(22)/21(1)	1/1(0)	1(1)/1(1)	8(6)/7(1)	5(4)/5(1)	2(1)/2(0)	2(1)/2(0)	1(1)/1(0)	398(200)/305(3)	58(39)/42(1)	23(19)/19(1)	4(3)/4(2)	10(6)/6(4)	6(4)/2(0)	1(1)/1(0)	
		1014(686)/865(20)																

		ゴーマル地方										グジャラート地方				合計	
		ナウシャロー	ビラウ	ニン・ワリ	グムラ	マル	ゴーマル地方	トロー・ウ・ラ	ロー・タル	スル・コ・タダー	クンターシー	バーグ・マ	ミリ・カラット	その他の地方	出土地不明	合計	
単体	実在の動物	象のウシ														71(53)/70(1)	
		コブウシ				1		1(1)/1(1)	3(2)/3(0)							44(27)/44(1)	
		その他ウシ科の動物														83(8)/71(5)	
		スイキエウ							1(1)/1(0)							16(11)/15(6)	
		ヤギ														18(16)/17(0)	
		サイ														20(12)/19(4)	
		ソウ						1(1)/1(0)	1/1(0)					1(1)/1(0)		40(26)/40(1)	
		ノウサギ														17(9)/17(1)	
		ト							1/1(0)							2(2)/2(0)	
		一角獣	4(3)/4(0)	1(1)/1(0)	2(2)/2(0)			6(6)/6(0)	46(33)/46(1)	1(1)/1(0)		1/1(0)				1/1(0)	
物語の場面	想像上の動物	複頭獣						2(2)/2(2)								994(653)/898(20)	
		複合獣														14(12)/11(7)	
		動物														18(13)/18(1)	
		斜に描かれた動物														1(1)	
		スタンプ(誰か?)														1(1)	
		起														1(1)	
		実在の動物(動物群)	1(1)													1	
		有首神/人物が登場する場面		1				3(3)	4(3)				1(1)		2(2)	28(21)	
		社文						2(2)	1(1)							98(63)	
		同心中・内文						1(1)	1(1)							10(10)	
文字のみ	文字のみ	十文字														19(15)	
		その他														17(16)	
		文字のみ							13(9)	1(1)						44(30)	
		破片(モチーフ不明)						2	1							60(44)	
		未製品	5(5)/4(0)	2(1)/1(0)	2(2)/2(0)	1(1)	1	18(16)/10(0)	77(51)/52(1)	2(2)/1(0)	1(1)	1/1(0)	1(1)/1(0)	2(2)		1628(1041)/1916(60)	
		合計		98(70)/7(0)			1014(686)/865(20)										

*表の見方: □(○) / □(○) = 正体 / 斜体 = モチーフ明確 (サイズ計測可) / モチーフの向き明確 (右向きのモチーフ) . . . 数値は印章の個数を表す

(2) インダス文字

印面に刻まれるインダス文字もモチーフの項で述べるべきであるが、ここでは個別に取り上げてその特徴をまとめておきたい。インダス文字(400字程度あるとされる)は、1960年代からフィンランド(Parpola 1994)とソビエト連邦(当時)のチーム(Zide and Zvelebil 1976)によりその配列などが統計学的に検討され、現存する言語の中ではドラヴィダ(Dravidan)系言語に構造的に似ているという結果が導き出された。しかしながら、各印章に刻まれた文字が平均すると5文字程度に過ぎないことや、古代エジプトの象形文字であるヒエログリフを解説に導いたロゼッタストーンのようなバイリンガルの資料が存在しないことも大きく響いており、未だに解説されていない。最近では、インダス文字は文字ではないとの仮説も発表され、活発な議論が展開されている(Farmer et al. 2004など)。このように未だ解説されていないインダス文字であるが、その配列に注目すると一定の傾向を見出せるようである。バルポラによれば、氏のサイズ分類に基づく大型の印章に刻まれたインダス文字の文字列には何らかの共通性が認められるという(Parpola 1986)。読み方(文字配列)に関しては、左から右に読むことが基本原則とされている⁹⁾。スタンプ型印章という形態および印章の陰影を留めた遺物の存在を考慮すれば、捺印の状態で正字として機能するものであると考えられる。

(3) 配列パターン

ここで確認する配列パターンとは、印面に認められる主モチーフと文字の配列に関する約束事のことである。印面に認められるモチーフの配列パターンは、

配列パターンⅠ：文字(図3中では「T」と表した)を
印面の上半に刻み、図像を下半に刻む

配列パターンⅡ：図像を中心に刻み、文字を隙間に埋め込む

配列パターンⅢ：文字は刻まれず、図像のみ

の3パターンに分類可能であり、全体の約96.3%(1114/1157)が配列パターンⅠで表現され、配列パターンⅡが約3.2%(37/1157)、配列パターンⅢが約0.5%(6/1157)となる(図3)。要するに、印面を構成するデザインに関しては文字を印面の上半に、主モチーフを下半に刻むというパターン=配列パターンⅠを基本とすることが分かる。その場合、モチーフがほぼ例外なく左向きになる(小茄子川 2007)。モチーフが左向きの例に限れば、全体の99.3%(1093/1101)が配列パターンⅠで表される。また、モチーフの向きが判別し難いために検討の対象外とした「物語の場面」のモチーフが刻まれた印章は、インダス文字を有さない配列パターンⅢで表現される場合が多い。「物語の場

	配列パターンⅠ	配列パターンⅡ	配列パターンⅢ
左向きのモチーフ 1101点	1093点=99.3%	7点=0.6%	1点=0.1%
右向きのモチーフ 56点	21点=37.5%	30点=53.5%	5点=9%
合計 1157点	1114点=96.3%	37点=3.2%	6点=0.5%
対応すると考えられる鈕のタイプ	鈕タイプⅠ		
	鈕タイプⅡ		

* 点数は、配列パターンが明らかな印章に限る

図3 配列パターンの出現頻度と鈕型式

面」は文字を伴わずとも、何らかの情報を伝達可能であったのかもしれない。

(4) つまみ(鈕)の型式

印章の裏面に認められるつまみ(鈕)は、印面に表現されるモチーフと同様にインダス式印章のデザインを規定する際の重要な指標である。Joshi and Parpola 1987 および Shah and Parpola 1991 においても、印章の裏面を全て観察できる訳ではないが、野口雅央の先行研究(野口 2002, 2003, 2005)などを手掛かりとすれば、つまみ(鈕)は大きく2つのタイプに分類することができる(図3)¹⁰⁾。タイプⅠは典型的なタイプと認識されるものであり、方形または隅丸方形形状のつまみ上に認められる刻線を中心線として、左右シンメトリーに表現される。タイプⅡは、つまみ上に刻線を施さないシンプルな方形または隅丸方形形状のものである。ここで確認すべきポイントは、タイプⅠは基本的に上述の配列パターンⅠと対応することである。言うまでもなく、その組合せは左向きのモチーフとセット関係を構成すると理解できる。

(5) サイズ

インダス式印章のサイズは、その縦横長の計測値に基づき、特大型=70~50mm、大型=50~35mm、中型=35~20mm、小型=20mm以下の4つのカテゴリーに分類できる(図4)。ただし、この4区分の内、大型~小型の分類は全モチーフを見通した上で設定したカテゴリーであり、経験的に導き出したものである。そこで本論では、図4に太線の囲みで示したように特大型とそれ以外(大型~小型)という二区分で理解していただければ十分である¹¹⁾。これらのカテゴリーは、モチーフまたは遺跡ごとに

異なった分布状況を示す。例えば、特大型のカテゴリーをもつモチーフは一角獣のみに限定される¹²⁾。よって、図4は一角獣のサイズ分布を表しているが、これを基本として各サブカテゴリーを決定することに問題はない。また、特大型を含む全てのカテゴリーをもつ遺跡は、モヘンジョダロ遺跡とハラッパー遺跡、チャヌフダロ (Chanfudaro) 遺跡の3遺跡に限定される。前2者はインダス文明社会で中心的な役割を果たした二大都市遺跡であり、チャヌフダロ遺跡はインダス文明の特産品として理解される紅玉髄製ビーズやその他工芸品の生産センターであったとされる遺跡である。こうしたことから、インダス式印章は一角獣を最上位とするサイズの論理に従い管理されており、その特徴的な分布状況にはインダス文明社会におけるヒエラルキーの存在を認め得るのである (小磯・小茄子川 2009)。

(6) 分布傾向

すでに確認したように、出土数の約84% (1361/1628) はシンド (Sind) 地方に位置するモヘンジョダロ遺跡と西部パンジャブ地方に位置するハラッパー遺跡の二大都市遺跡に集中する。その他の地域では、ガッガル川流域 (東部パンジャブ・北部ラージャスターン・ハリヤーナー) から102点、カッチー (Kutch)・グジャラート (Gjarat) 地方から99点、その他の地方から15点 (バルーチスターン (Balochistan) 地方9点、ゴーマル (Gomal) 地方2点、マクラーン (Makran) 地方1点、アフガニスタン (ショルトゥガイ遺跡) 1点、出土地不明2点) が確認されている (表2を参照のこと)。この分布状況からは、インダス式印章は基本的に都市遺跡で機能した器物であることが分かる。特に出土数が多い地域、すなわちシンド地方、西部パンジャブ地方、ガッガル川流域、グジャラート地方をインダス式印章の主要分布地域および使用圏として認識することが可能であろう。また、インダス文明圏外に目を向ければ、数は限られるもののメソポタミアやアラビア湾岸、南トルクメニアからの報告もある (Sarianidi 2006; Vidale 2005; 小磯 2005)¹³⁾。出土状況に関しては、これまでに印章の集積遺構などは発見されておらず、基本的に土器片やその他土製品とともに住居の廃土中から検出される場合が多いようである。ただし、南トルクメニアのゴヌール・デペ (Gonur depe) 遺跡では、左向きのゾウが刻まれたインダス式印章が特徴的な布に覆われた状態で発見されている。

次に、印章の印影を留めた遺物 (封泥および護符) の分布傾向を確認しておきたい。本論では、インダス式印章 (i) に由来すると考えられる印影に限定してカウントした¹⁴⁾。インダス式印章の印影の出土数は135点と少なく、封泥の集積遺構の存在も確認されていない。出土数を遺跡

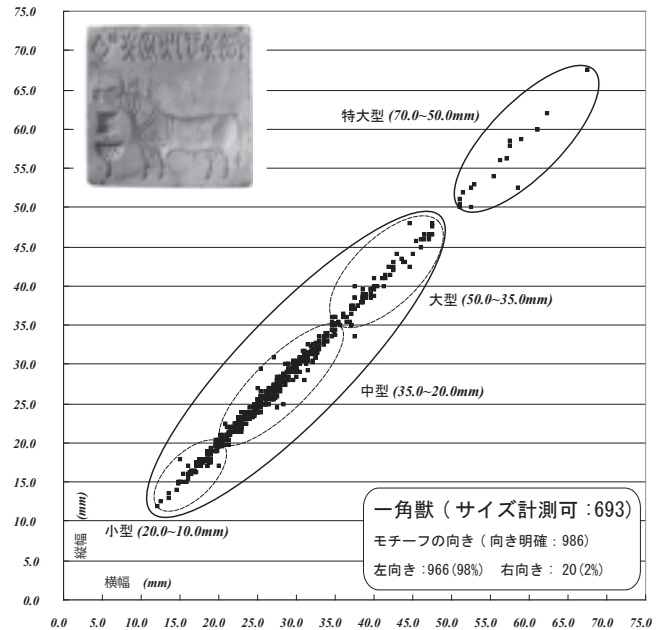


図4 インダス式印章のサイズ (一角獣のモチーフ)

別に見ると、次のようになる。また、以下に記すモチーフの向きは印影での向きを示すので、印面での向きは反対となることに注意されたい。モヘンジョダロ遺跡19 (一角獣8 / すべて右向きかつ配列パターンI、コブウシ1 / 右向きかつ配列パターンI、ゾウ1 / 右向きかつ配列パターンI、動物群4、物語の場面1、幾何学文2、不明2 / 内1点は右向きかつ配列パターンI) 点、ハラッパー遺跡3 (一角獣1 / 右向きかつ配列パターンI、複合獣1 / 右向きかつ配列パターン不明、不明1) 点、ロータル (Lothal) 遺跡95 (一角獣44 / すべて右向きかつ配列パターンI、ゾウ11 / 不鮮明な例1点を除きすべて右向きかつ配列パターンIを示す同一印章に由来する、複頭獣1 / 右向きかつ配列パターンI、幾何学文3、文字のみ13、不明23) 点、カーリーバンガン (Kalibangan) 遺跡11 (一角獣6 / 5点が右向きかつ配列パターンI また1点が左向きかつ配列パターンI、コブウシ1 / 右向きかつ配列パターン不明、ヤギ1 / 左向きかつ配列パターンII、複合獣1 / 左向きかつ配列パターンI、不明2) 点、バナワリー (Banawali) 遺跡1 (物語の場面1) 点、ラキー・ガリー (Rakhigarhi) 遺跡1 (一角獣1 / 右向きかつ配列パターンI) 点、フェルマーナー3 (一角獣2 / 右向きかつ配列パターンI、動物1 / 右向きかつ配列パターン不明) 点、ローヒラ (Rohira) 遺跡2 (物語の場面2) 点。

このように、インダス文明の港湾都市として理解されるロータル遺跡では、印章77点 / 印影を留める遺物95点という特徴的な出土状況を示している。同様にカーリーバンガン遺跡でも、印章58点 / 印影を留める遺物11点という

出土状況である。こうした分布傾向は、モヘンジョダロ遺跡の印章 963 点／印影を留める遺物 19 点やハラッパー遺跡の印章 398 点／印影を留める遺物 3 点という状況と比較すると非常に特徴的なものであることが理解できる。こうした分布傾向の違いは、交易活動などにおける各遺跡の性格差・機能差を示しているものと考えたい。

3. インダス式印章のデザインシステム

前節において、インダス式印章の諸特徴を概観した。ここではそれらの特徴と拙稿（小茄子川 2007）の議論に基づき、インダス式印章のデザインを規定する法則性＝デザインシステム（Design System）を再確認しておきたい。まずは、デザインシステムという用語について説明しておく必要がある。デザインシステムという用語は、鈴木公雄の論考（Suzuki 1970）から手掛りを得て展開したものである。氏は、土器に存在する装飾の規則性を『装飾の方式（Design System）』として把握した。本論で使用する「デザインシステム」という用語は、氏の用語概念を参考としている。つまり、「装飾に認められる厳格な約束事を規定するシステム」を意味する用語として使用していきたい¹⁵⁾。インダス式印章にみられるデザインが単なるモチーフの集合体ではなく、ある規則性によって配置されているのであれば、そこにインダス式印章におけるデザイン上の規範ないし、モチーフ相互を構造化する法則性を読み取ることができるはずである。

モチーフ相互を構造化する法則性を検討するには、印面に陰刻されたモチーフの配列パターンから議論を始めると分かり易い。先に確認したように、全体の約 96.3% が配列パターン I で表現されることが明らかであるからだ。つまり、デザイン配列の基本原則はかなり厳格なものであったと考えて差し支えない。さらにその場合、印面の主モチーフはほぼ例外なく左向きとなり、裏面のつまみ（鈕）の型式はタイプ I となる。すなわち、インダス式印章のデザインは、「左向きの主モチーフをインダス文字とともに配列パターン I で表現し、裏面にタイプ I のつまみを持つ」ことを基本とするのである。これを拙稿（小茄子川 2007）で提示した見解の修正版として、改めてインダス式印章のデザインシステムとして位置づけたい。インダス式印章のデザインには、その全体を通して、ここに認められるような厳格な法則性を認めることができるのである。この左向きのモチーフに特徴づけられるデザインシステムを、以下で詳述する右向きのモチーフに特徴づけられるデザインシステムと区別すべく、「デザインシステム A」としておく。

ここで確認したデザインシステムは、幾何学文様を主モチーフとする先／初期ハラッパー文化期（Pre-/Early Harappan Phase）の印章のデザインには認めることがで

きない。また、このデザインシステムの創出プロセスには、土器彩文から印章の主モチーフへの特定モチーフの取捨選択という仕組みを認めることができ、インダス式印章のデザインシステムの確立は印章の主モチーフとハラッパー式彩文土器に描かれる彩文要素との明確な使い分けの開始も意味している（小茄子川 2007, 2008a, 2008b, 2008c）¹⁶⁾。こうしたことから、インダス式印章のデザインシステムは、インダス文明社会全体における特定シンボルの使用に関する約束事に深く関わるものであると考えることができる。

右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章

前章において、インダス式印章のデザインを規制する法則性、すなわちデザインシステムの実体を確認した。それは、「左向きの主モチーフをインダス文字とともに配列パターン I で表現し、裏面にタイプ I のつまみを持つ」という厳格な約束事として理解することができる。本章では、この「デザインシステム A」に規定されることのない印章の評価を目的として、右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章を詳細に検討する。

インダス式印章全体における割合を見てみると、資料総数 1316 点（モチーフの向きが明確な資料総数、表 2 を参照）の内、左向きのモチーフが刻まれた印章が 1256 点（95.4%）、右向きのモチーフが刻まれた印章が 60 点（4.6%）という割合である。

1. 右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章のデザイン
本節では、「デザインシステム A」に規定されるインダス式印章との相違点に注意しつつ、右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章の諸特徴を詳しく確認する。

(1) モチーフ

右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章は、計 60 点存在する。その内訳は、一角獣 20 点（33%）、ヤギ 10 点（16%）、複頭獣 7 点（11%）、スイギュウ 6 点（10%）、ウルス種とされるウシ 5 点（8%）、サイ 4 点（6%）、短角のウシ 1 点（2%）、ゾウ 1 点（2%）、トラ 1 点（2%）、コブウシ 1 点（2%）、その他 4 点（6%）である。モチーフごとの割合を見てみると、ヤギのモチーフに関しては 59%（10/17）が右向きに表現されており、右向きの 10 点中 8 点はガッガル川流域から出土するという状況を示している。複頭獣に関しては 64%（7/11）、スイギュウに関しては 40%（6/15）、ウルス種とされるウシ（表 2 の「その他ウシ科の動物」の分類項目に一括してカウントしてある）に関しては 40%（4/10）が右向きに表現されている。ちなみに、一角獣に関しては 2%（20/986）、短角のウシに関しては 1.4%（1/70）、コブウシに関しては 2.3%（1/44）

のみが右向きに表現されている。このように、モチーフによって左向きと右向きの割合が異なることが分かる。

(2) インダス文字

右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章には、共通する文字を共有した例を認めることができる。特に、ガッガル川流域に位置する諸遺跡から出土した右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章は、「樹木」・「槍」・「魚」・「列点」の形をしたインダス文字を共有する頻度が高い(図5)¹⁷⁾。例えば、ビッラーナー(Bhirrana)(図5-1; Kumar and Dangi 2007; Rao et al. 2005: Pl. 3)、ファルマーナー(図5-2; 上杉 2009: 図10-1, 2; 小茄子川 2009)、パナーワリー(図5-3 ~ 5; Joshi and Parpola 1987: B-3 ~ 5, 10)、カーリーバンガン(Joshi and Parpola 1987: K-16, 18, 27, 34, 50)などで認められる。さらに、ガッガル川流域に特徴的に見られる文字パターンを、モヘンジョダロ(Joshi and Parpola 1987: M-223; Shah and Parpola 1991: M-737, 749, 1170)、ハラッパー(Joshi and Parpola 1987: H-73, 85)、南部シンド地方に位置するバーラーコート(Bala Kot)(Shah and Parpola 1991: Blk-5)、カッチー地方に位置するドーラーヴィーラー(Dholavira)(図5-6)などにも認めることができる。これらの例は、特定の文字パターンが右向きのモチーフとセット関係を構成し、広範な地域で共有され機能していたことを示していると考えたい。また、「デザインシステム A」に規定されたインダス式印章に陰刻される文字と比較した場合、このタイプの印章に陰刻される文字が反転されて表されることはないようである。ただし、文字配列の比較・検討に関しては今後の課題である。

(3) 配列パターン

モチーフの配列パターンに関しては、「デザインシステム A」を構成する配列パターンⅠが約37.5%(21/56)、配列パターンⅡが約53.5%(30/56)、配列パターンⅢが約9%(5/56)という割合である。「デザインシステム A」を特徴づける配列パターンⅠよりも、配列パターンⅡを採用する例が多い。つまり、配列パターンⅡと先に述べたインダス文字のパターンが、右向きのモチーフとセット関係で表現される場合が多いということが分かる。

(4) つまみ(鈕)の型式

右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章は、印面と側面を直線状に斜め方向に研磨し、裏面も鈕を中心にするようにして直線状に研磨されることで仕上げられることを基本とする(図2)。この特徴は実見した限りにおいて、裏面を円を描くように研磨する「デザインシステム A」に規定されるインダス式印章の製作痕跡とは異なることを指

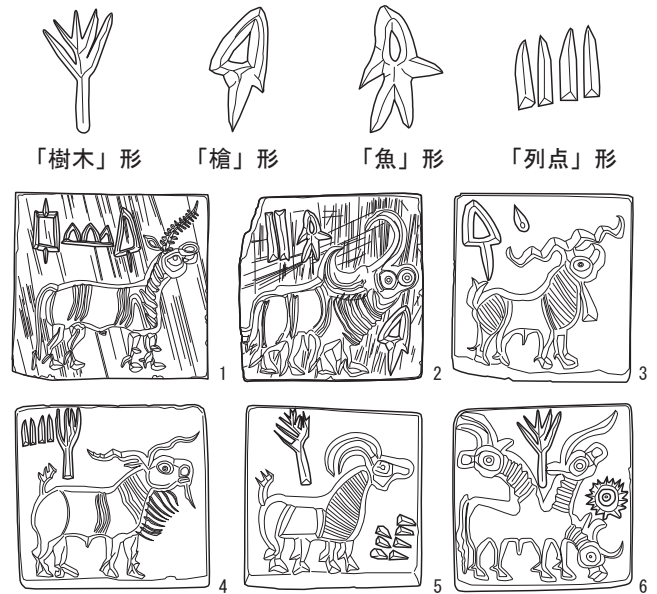


図5 共通するインダス文字

摘できる。鈕の型式も異なり、中心に線を刻まないシンプルな方形または隅丸方形の構造=タイプⅡとなる場合が多い(図2; 図3; Joshi and Parpola 1987: M-270, K-34, 50, B-8, 9, 12; Shah and Parpola 1991: M-977, 1139, 1170, Blk-5; 上杉 2009: 図10-1, 2を参照のこと)。

(5) サイズ

図6に、右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章のサイズ分布を示した。図4と比較すると、その差異を明確に把握できる。全体としては、特大型のカテゴリーは存在せず、大型～小型、特に中型のカテゴリーを中心とする。ただし、ガッガル川流域から出土した右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章(図6中の太線囲み部分)は、小型のカテゴリーが中心となる。

(6) 分布傾向

分布傾向は図7に示した通りであり、非常に特徴的である(図7中の円グラフは灰色部分が左向きのモチーフの割合を、黒色部分が右向きのモチーフの割合を表す)。右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章は、ガッガル川流域(東部パンジャブからハリヤーナー地方)において特徴的な分布傾向を示すことを認めることができる。他地方では左向きのモチーフが優勢であるに対し、特にガッガル川流域(カーリーバンガン遺跡を除く)では右向きのモチーフが全体の72%(23/32)を占めるという出土傾向を示している。中でも、パナーワリー遺跡においては全体の89%(17/19)が右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章である。同地方のインダス関連遺跡と比較するとハ

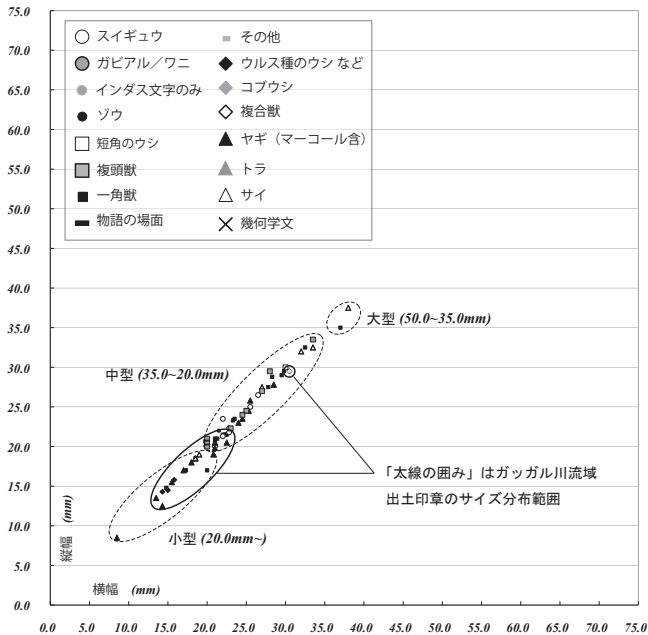


図6 インダス式印章のサイズ（右向きのモチーフ）

ラッパー文化の影響が強いと考えられ、モヘンジョダロ遺跡と同様な都市プラン（分離型。後章で説明する）をもつカーリーバンガン遺跡では右向きのモチーフが全体の26%（11/42）を占める。右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章全体の約57%（34/61）が、ガッガル川流域からの出土である。数値から判断すれば、カーリーバンガン遺跡は、左向きが優勢の地域と右向きが優勢な地域の間的な様相を示しているものと理解することもできよう。一方、シンド地方では全体の2.3%（20/865）、カッチー・グジャラート地方では全体の6.5%（4/64）が右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章であり、パローチスターン地方では7点全てに左向きのモチーフが刻まれている。遺跡個別で見ると、モヘンジョダロ遺跡では全体の1.9%（16/825）、ハラッパー遺跡では全体の1%（3/305）という割合であり、ガッガル川流域の特殊性を確認することができる。また、小磯学の集成（小磯2005）に基づけば、インダス文明圏外から出土したインダス式印章に刻まれた主モチーフは右向きで表現されることはない¹⁸⁾。アフガニスタンのショルトゥガイ遺跡出土のインダス式印章に刻まれたサイのモチーフも左を向く。

印章の印影を留めた遺物（封泥および護符）の分布傾向に関しては、先に確認した通りである。右向きのモチーフに特徴づけられるガッガル川流域からは、印章の印影を留めた遺物が16点確認されている。その内、右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章に由来する印影、つまり左向きのモチーフを留める印影はカーリーバンガン遺跡から3点、ファルマーナー遺跡から2点のみの報告がある。

2. 右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章の意義

右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章は、モチーフの構成や文字、つまみ（鈕）の型式、分布傾向から見た場合、「デザインシステム A」に規定される左向きのモチーフが刻まれたインダス式印章とは異なる側面をもつことが明らかになった。出土傾向からは、右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章はガッガル川流域に特徴的に分布することが分かる。印面に刻まれるモチーフに関しては、配列パターンⅡで表現される例が多く、さらに同一のインダス文字を共有する頻度も高い。つまみ（鈕）の型式に関しても、実見した限りでは左向きのモチーフが刻まれたインダス式印章とは異なるタイプⅡをもつ。

モチーフごとの特徴を述べれば、ヤギのモチーフはガッガル川流域を中心に分布し、その場合、モチーフは右を向く。これは、ヤギがガッガル川流域に特徴的なモチーフであることを示しているものと考えられる。また、一角獣や短角のウシ、コブウシなどが基本的に左向きに表現されるのに対して、複頭獣やスイギュウ、ウルス種とされるウシは右向きに表現される割合が高い。これは、モチーフ間の意味の差異を考える上で重要な傾向であろう。

これらの分析結果からは、右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章が、従来指摘されることのなかったインダス式印章の地域性または多様性を体現している可能性が高いと結論づけることができる¹⁹⁾。ガッガル川流域に特徴的な右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章が同一のインダス文字を共有している場合もあることを踏まえ、これらの印章は、「デザインシステム A」に規定される左向きのモチーフが刻まれたインダス式印章とは異なる法則性あるいは別のデザインシステム＝「デザインシステム B」に基づき機能していたと考えたい。

すなわち、インダス式印章は、そのデザインを左向きのモチーフに特徴づけられる「デザインシステム A」と右向きのモチーフに特徴づけられる「デザインシステム B」により法則化されることで、機能していたものと考えられる。しかし、これらのデザインシステムに規定されないインダス式印章の存在も無視することはできない。本論では言及を避けたモチーフの向きに関係なく機能していたと考えられる「物語の場面」・「文字のみ」・「幾何学文」を主モチーフとする印章群である。したがって結論としては、インダス式印章のデザインは、「デザインシステム A」と「デザインシステム B」および「モチーフの向きに関係なく機能していた一群を規定するデザインシステム」という法則性に従い、その全体としてのデザインシステムを確立し、インダス文明社会において機能していたものと考えたい。ただし本論の論旨上、「デザインシステム A」と「デザインシステム B」に焦点を絞り、以下の考察を進める。

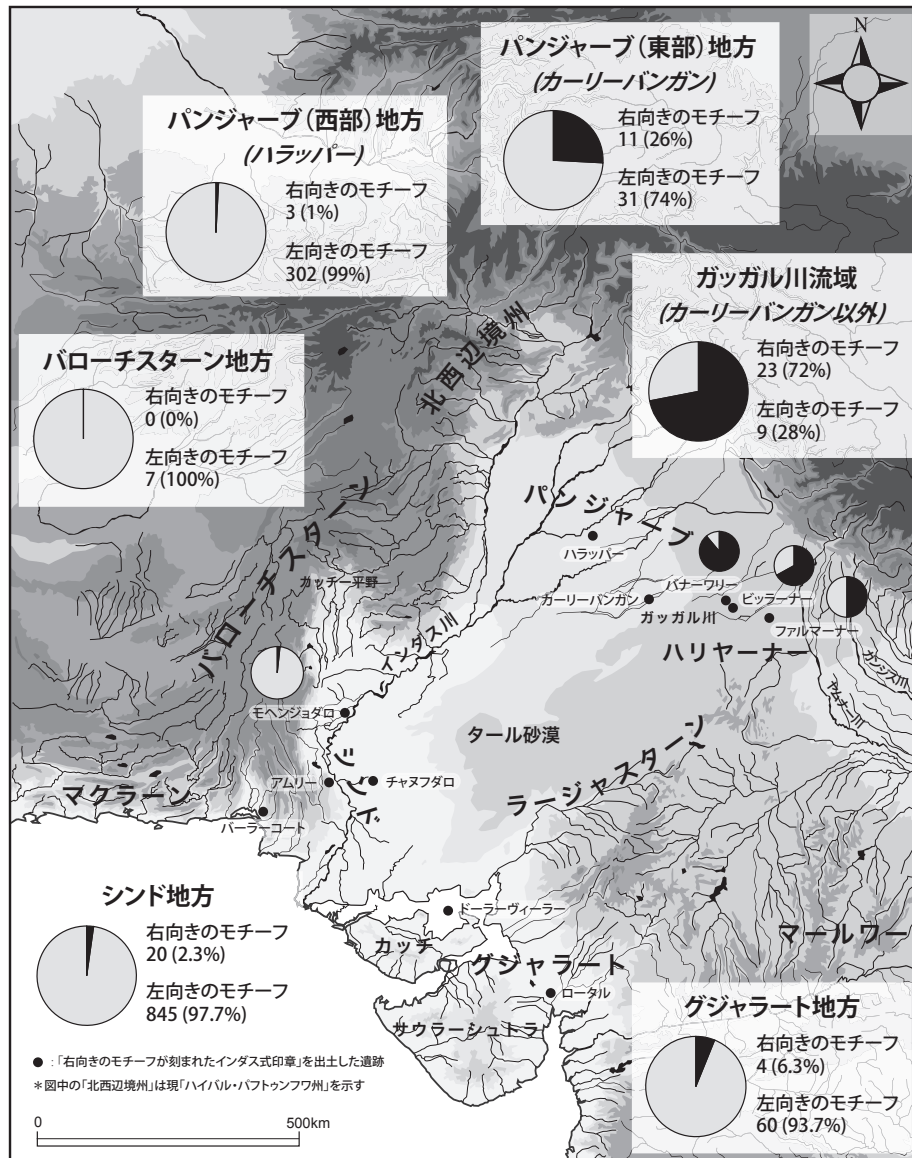


図7 右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章の分布傾向

インダス文明社会におけるハラッパー文化の意義

インダス式印章には、「デザインシステム A」と「デザインシステム B」に規定されるものが存在する。本論の議論からは、前者が左向きのモチーフ、後者は右向きのモチーフにより特徴づけられていることが明らかである。さらに、「デザインシステム B」に規定されるインダス式印章は、その地域性または多様性を体現しているものと評価した。非常に分かり易い分類基準であると思うし、インダス文字が解読されていない現状において、インダス式印章さらにはハラッパー文化の意義を考察する大きな手掛りとなるはずである。なぜならば、インダス式印章は、インダス文明社会を特徴づける代表的な物質文化としてのハラッパー文化を体現する最たる器物であるからだ。本章では、インダス式印章に認められた地域性または多様性が意味するもの

を評価すべく、ハラッパー土器様式 (Harappan Style Pottery) と各地域における土器様式の関係性や都市類型 (形態) の在り方についても先行研究に基づき整理・検討を加えることで、多角的にハラッパー文化の意義を検討してみようと思う。

繰り返しになるが、ハラッパー文化とは、インダス文明社会を特徴づける代表的な物質文化である。その創出プロセスと特質に関しては、ハラッパー式彩文土器に描かれる彩文様式の分析を通して、これまでに詳細な検討を加えてきた (小茄子川 2008a, 2008b, 2008c, 2010a)。ハラッパー文化とは、既存の地域伝統諸文化に特徴的な特定の文化要素を取捨選択し再構造化することで創出された都市的伝統であり、周辺としての地域諸文化を特徴づける特定の文化要素を内在させているが故に、地域諸文化側から見た場合

でも違和感のない文化伝統である、というのが結論である。始めから都市社会を前提として創られた文化伝統であると考えられ、地域的な束縛の強い既存の地域伝統諸文化とはその点で大きく異なる性質をもつ。

1920年代のインダス文明の発見以後、この文明社会を特徴づける物質文化は、画一的な様相を示しかつ広範に分布するハラッパー文化を中心として構成されるものと理解されてきた。つまり、「インダス文明社会=ハラッパー文化」という等式が研究者の基本認識として長らく存在してきたのである。遺跡の発掘を行い、ハラッパー文化系の遺物（例えばインダス式印章やハラッパー式土器）が発見されれば、その遺跡はハラッパー文化に属するものであり、それに応じて「インダス文明圏=ハラッパー文化圏」も拡張されてきたと言える。そうした認識に基づいたハラッパー文化と既存の地域伝統諸文化の評価は、決して正しいものであったとは言い難い。ハラッパー文化の存在を強調するあまり各地域の伝統諸文化の意義は軽視され、各地域におけるハラッパー文化の受容プロセスの検討も不問に付されてきたからである。

しかしながら、現在では特にガッガル川流域やグジャラート地方における考古学的調査の進展（Dangi 2009; Kharkwal et al. 2008 など）により、インダス文明社会を構成する文化的様相は斉一的または画一的であるという認識も見直されつつあり、その地域性や多様性を検討する研究やハラッパー文化と既存の地域伝統諸文化の関係性に注目した研究（Shinde et al. 2008a, 2008b; 上杉 2008, 2009, 2010 など）が主流となりつつある。それらの研究に基づき、「インダス文明社会=ハラッパー文化」というかつての等式は見直され、インダス文明社会は都市的文化としてのハラッパー文化と各地域に伝統的に存在する地域諸文化の混合または併存関係により構造化された社会構成体である、という理解が提唱され始めている。すなわち、「インダス文明社会=ハラッパー文化+各地域の伝統諸文化」という新たな等式である。さらに、中心から周辺に向かうほどハラッパー文化の濃度は薄れ、「ハラッパー文化<各地域の伝統諸文化」という傾向を示すようだ。

さてそれにしても、インダス文明社会の二大都市遺跡とされるモヘンジョダロ遺跡とハラッパー遺跡の物質文化は、基本的にハラッパー文化のみから構成されると言って良い。インダス式印章の約84%が両遺跡からの出土であることもこれを裏付ける。土器に関しても搬入土器を除けば、そのほとんどがハラッパー式土器から構成され、その他土製品やビーズ製品、金属製品などもハラッパー文化の範疇で捉えることができる（Dales and Kenoyer 1986; Mackay 1938; Marshall 1931; Vats 1940）。この様相をインダス文明社会の中心地におけるものと理解すれば、その周

辺地域における物質文化の様相はどういったものとして具体的に理解できるであろうか。ここでは、印章と土器、都市類型の3側面から検討してみる。なぜならば、これらの3つの文化要素は、ハラッパー文化と周辺地域における伝統諸文化の関係性を具体的に体现するものであると考えられるからである。

(1) インダス式印章

インダス式印章に関しては、本論の議論からすでに明らかである。「デザインシステムA」と「デザインシステムB」に規定される印章に大きく二分することができ、後者は右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章としてガッガル川流域に特徴的に分布する傾向を示す（図7）。その他の地域では、左向きのモチーフが刻まれたインダス式印章が支配的である。図8には、ハラッパー式土器古段階～中段階におけるハラッパー文化と周辺地域における伝統諸文化の在り方、つまりインダス文明社会の在り方に関する概念図を提示した²⁰⁾。「クッリ文化の広がり」（「」内は、図8中の文化範囲を示すキャプションと対応する。以下も同様）とした地域では、ニンドーワリ（Nindowari）遺跡以外でインダス式印章を確認することはできない²¹⁾。クッリ文化とは、先／初期ハラッパー文化期にバローチスタン（Balochistan）丘陵において展開した諸文化の文化伝統を継承したものとして理解できる（Shudai et al. 2010; 近藤ほか 2007）。基本的にインダス式印章を出土しないことから、ハラッパー文化との関係性は他地域と大きく異なっていたものと考えられる。

(2) ハラッパー式土器と地域伝統諸文化を特徴づける土器様式の関係

当該期に展開した土器の様相に関しては、先行研究によりその地域性が明確に把握されている。図8中の「ハラッパー文化の広がり」は、インダス式印章とハラッパー式土器の分布範囲から確定したものである。図の中心に示した「ハラッパー文化の中心部」とした地域、特にモヘンジョダロ遺跡とハラッパー遺跡ではハラッパー式土器が極めて優勢である。一方、右向きのモチーフが刻まれた印章に特徴づけられるガッガル川流域ではハラッパー式土器は万遍なく出土するが、出土数としては極めて客体的な様相を示す。つまり、ガッガル川流域に伝統的に存在したソーティ・シースワール土器様式（Sothi-Siswal Pottery Style）が主体となるのである（Shinde et al. 2008a, 2008b; 上杉 2008, 2009; 小茄子川 2010b）。ドーラーヴィーラー遺跡やロータル遺跡などが立地するカッチーおよびグジャラート地方でも、ハラッパー式土器は客体的な出土状況を示している。当地域に伝統的に存在するアナルタ式土器（Anarta

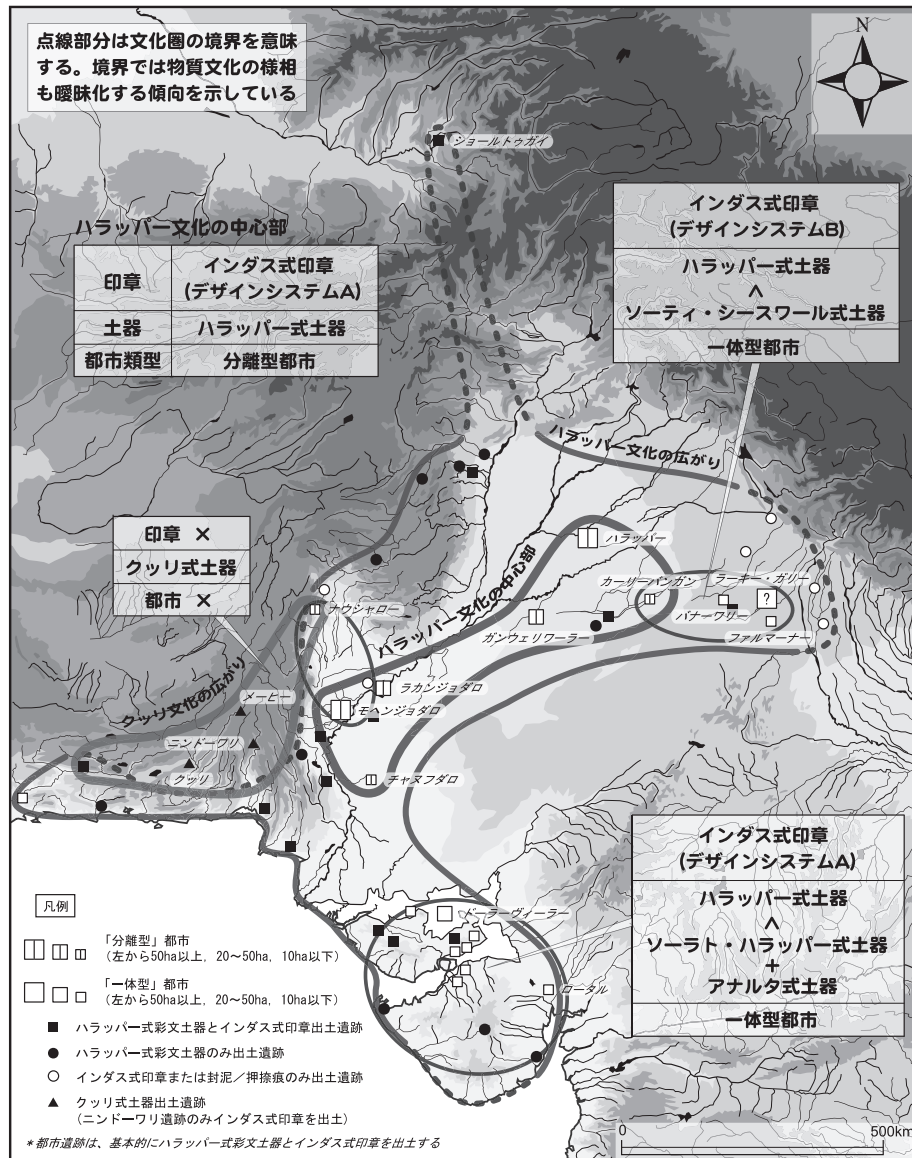


図8 ハッパ文化と周辺地域における伝統諸文化の関係を示した概念図

Ware) とソーラト・ハッパ式土器 (Sorath Harappan Ware) と呼称されるハッパ式土器と関係性をもちながらも地域的特色を強く発現する土器型式が主体となる (木村 2009; 上杉 2008 など)。また、「クッリ文化の広がり」とした地域ではハッパ式土器と器形などの点で関係性を持ちながらも、全く異なる彩文様式をもつクッリ式土器が展開している (Shudai et al. 2010; 近藤 ほか 2007)。

(3) 都市類型の分布

インダス文明社会においてハッパ文化の一要素を構成すると考えられる都市は、その形態的特徴に基づき分類され議論されている。つまり、西方に位置する城塞と東方の市街地が周壁によりそれぞれに隔てられる「分離型都市」と両者が同一の周壁内に位置づけられる「一体型都市」

である (小磯 1998; 近藤 2004 など)。分布状況に関しては図8から明らかなように、「ハッパ文化の中心部」では「分離型都市：モヘンジョダロ、ハッパ、チャヌフダロ、カーリーバンガンなど」が特徴的であり、その周辺部では「一体型都市：ローラーヴィーラー、ロータル、パナーワリーなど」が特徴的であることが分かる。全ての都市形態が、中心地としてのモヘンジョダロ遺跡やハッパ遺跡と同一ではないのである。インダス都市に認められる形態差の意義に関しては、今後の検討を待つ必要がある。しかし、ここで確認した「分離型都市」と「一体型都市」の分布域の違いは、各地域における都市計画の自由度や地域性を反映しているものとして考えたい。また、「クッリ文化の広がり」とした地域にはインダス都市は存在しない。

ここまでの検討から、インダス文明社会と総称される社会構成体は、文化の多様性により特徴づけられていることを確認できた。その文化的様相は中心部では画一的かつ静態的であるように見えても、周辺部では多様かつ動態的な様相を示しているのが実体だ(図8)。周辺地域においてはハラッパー文化が主導的な立場ではないことが明らかであり、さらにハラッパー文化自体にも明確な地域性または多様性が存在していることを理解することができる。

本章で検討した印章と土器および都市類型という3つの文化要素を総合的に検討すると、特にガッガル川流域は3つの文化要素すべての点で「ハラッパー文化の中心部」とは異なる様相を示していることが分り、「クッリ文化の広がり」とした地域に関してはハラッパー文化との関係性が他地域とは大きく異なる。また、「ハラッパー文化の中心部」とガッガル川流域の中間に位置するカーリーバンガン遺跡は、右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章の比率(右向きのモチーフが26%)にも認められたように、都市類型に関しては中心地域を特徴づける分離型都市でありながらも、全体として両地域の中間的な文化様相を示している。この特色は、カーリーバンガン遺跡の性格を考える際の重要な視点であると言えよう。中心地域とガッガル川流域間を政治的または経済的に繋ぐ中間都市としての位置づけが可能かもしれない。

さて、議題を戻し、ここまでのインダス文明社会における文化的多様性に関する議論を手掛りに、当文明社会におけるイデオロギー²²⁾の表徴という視点からハラッパー文化の意義を考え、インダス式印章に認められた地域性または多様性が意味するものを評価してみることにしよう。

ここまで繰り返し述べてきたように、ハラッパー文化はインダス文明社会の中心部と周辺部において大きく異なった在り方を示しており、さらに地域性または多様性を内在させていることが明らかである。しかしその一方で、ハラッパー文化が中心から周辺へと影響力の濃度を減少させながらも、広範な地域に分布していることもまた事実である。ハラッパー文化、特にインダス式印章とハラッパー式土器の広範な分布状況は両器物が当時の社会に広く受け入れられたことを示しており、それらが当社会の構成員に認識可能なシステムを内在させ、またそうでなければならない必然性を強制されていたものと考えることができる。こうした事象をインダス文明社会における共通認識すなわちイデオロギーの広がりとして理解し、それを把握するメルクマールとして考えることもそれほどの外的な推察ではないはずである。

このように考えた場合、ハラッパー文化の意義とその地域性または多様性はどのように理解することができるだろうか。この点で、K. クリスタンセン(Kristiansen)の「発

明」と「革新」に関する議論が参考となる。氏は、「発明」や「革新」は常に受け入れられるわけではなく、現行の社会やそのイデオロギー(世界観)などの枠組みに適合しなければ採用されない。こうしたことから、「発明」が採用されたとしても「モノの形」などは地域的文化的イデオロギーに適合するために変容する場合もあるし、地域的な装飾を施される場合もあると興味深い指摘をしている(Kristiansen 2004, 2005; Kristiansen and Larsson 2005)。

この見解は、「デザインシステムB」に規定される右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章に代表される、周辺地域におけるハラッパー文化の理解においても大変示唆深い。インダス文明社会の成立と極めて近い時期に創出または発明されたと考えられるハラッパー文化に関して、その周辺への波及プロセスと周辺側の受容プロセスは多様かつ動態的なものであったと考えられるからである。つまり、ガッガル川流域などの周辺地域においては、ハラッパー文化は既存の地域伝統諸文化と対立または矛盾しないような仕組みで、それらのシステムを変換または変換されることで、採用されたと言えるのではないだろうか。すなわち、ハラッパー文化とは周辺の地域伝統諸文化のイデオロギーに適合するために、その波及プロセスにおいて地域的更新が可能な都市社会の伝統であったと理解されるのである。これは、イデオロギーの浸透プロセスにおける伝達形態の変換または変容を示す例として非常に興味深い。逆の言い方をすれば、ハラッパー文化はその柔軟な適応能力を内在していたからこそ、周辺の地域伝統諸文化と対立することなく、広範に浸透し展開することができたと考えられるのである。

こうした特性は、都市社会の成立にともない創出された新たな都市的伝統としてのハラッパー文化のみが所有するものであり、インダス文明社会におけるハラッパー文化の意義はこの性質にあると言える。なぜならば、既存の地域伝統諸文化はその土地に伝統的に根を下ろしているために、自らのイデオロギーから逃れる事は容易ではないと考えられるからである。ハラッパー文化は地域伝統諸文化の社会に適合するという方法で、異文化間に軋轢を生むことなく中心から周辺へと浸透し、インダス文明社会を支える重要なイデオロギーの伝達装置としてその役割を果たしたのだと理解したい。ハラッパー文化に認めることができる地域性または多様性とはここで示したような事象を反映した発現形であり、本論で検討した右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章も、こうした側面からの評価が妥当であると考えたい。

おわりに

インダス文明社会を特徴づけるハラッパー文化の代表的

器物であるインダス式印章は、左向きのモチーフに特徴づけられる「デザインシステム A」と右向きのモチーフに特徴づけられる「デザインシステム B」および本論では言及を避けた「モチーフの向きに関係なく機能していた一群を規定するデザインシステム」により法則化され、その全体としてのデザインシステムを厳格に構造化し、機能していたものと考えることができる。また、「デザインシステム B」に規定されるインダス式印章に代表されるハラッパー文化の地域性または多様性は、ハラッパー文化が表徴したと考えられるインダス文明社会を規定するイデオロギーの浸透プロセスにおける、伝達形態の変換または変容という事象の側面を示している可能性もある。

インダス式印章は、文明社会の基盤を構成したはずの高度レベルの交換活動などから構成される社会・経済的行為の上で重要な役割を果たし、何らかの情報を保持または伝達する機能を持っていたと考えられる。そうした機能を持つ器物におけるデザインの違いを検討することは、その器物が機能した社会的行為およびその社会を規定していたイデオロギーの在り方に迫る一つの有益なアプローチ方法であると考えたい。

また、インダス文字に関しては本論では詳細に触れることを避けた。言語学者らの有益な解説作業に期待しながらも、筆者は本論で示したデザインシステムの観点に基づき、文字の配列パターンの読み込みなどを行っていきたいと考えている。

謝辞

本論は、日本西アジア考古学会第15回大会・研究発表会の口頭発表の内容に加筆・集成を加え、論考形式にまとめ直したものです。まず始めに、会場にてご質問・ご助言をいただいた先生方にお礼申し上げます。また、筆者のインド国内における調査・研究は、2008年度および2010年度インド政府奨学金（Indian Council for Cultural Relationship Scholarship Programme）に基づきます。駐日インド大使館および関連諸機関、関係者さまにお礼申し上げます。ファルマナー遺跡出土資料、およびピッラーナー遺跡表採資料の使用に関しては、長田俊樹先生、V. S. シンデー（Shinde）先生、M. D. カジャレ（Kajare）先生およびV. ダンギー（Dangi）氏に格別のご高配をいただきました。上杉彰紀氏、J. M. ケノイヤー（Kenoyer）先生、近藤英夫先生、小磯学先生、宗基秀明先生、小泉龍人先生、野口淳氏、木村聡氏、A. グリーン（Green）氏からは、多角的なご助言をいただきました。銘記して、お礼申し上げます。そして、査読を引き受けて下さった先生方に末尾ながら心よりお礼申し上げます。

本論の内容の一部は、拙稿（小茄子川 2007）と2009年にデカン大学院大学考古学科（Department of Archaeology, Deccan College, Post-Graduate & Research Institute, Deemed University）に提出したP. G. Diploma論文の一部に基づきます。

註

1) インダス式印章の創出または発明のプロセスに関しては、機会を改めて論じる予定である。西アジア銅石器時代における円筒

印章の発明に関しては、須藤寛史の興味深い研究（須藤 2006）がある。

- 2) インダス式印章に関する研究史全般に関しては、（小磯・小茄子川 2009; 小茄子川 2007）の研究史部分も併せて参考していただきたい。本論の目的は印章全般に関する議論にはないので、略述するに留める。
- 3) こうした研究背景の現状には、印章の型式学的検討の不在という重要な問題が存在する。公表された調査成果の蓄積ではこの問題にアプローチする術を持たないので、本論においても不問に付す他ない。ただし、公表資料を網羅的に検討することで導き出された「傾向」は、歴史のある側面を反映するものとして理解し得ると考えたい。
- 4) ファルマナー遺跡は、筆者が所属するデカン大学院大学考古学科が京都の総合地球環境学研究所のインダス・プロジェクト（リーダー：長田俊樹教授）と共同で発掘調査を行ったインダス遺跡である。
- 5) (ii) と (iii) のタイプの印章の検討は、機会を改めて論じることとする。(ii) は非常に数の少ない例であり、(iii) はインダス文字のみをモチーフとする。第一段階として、もっとも数が多い (i) のタイプの印章を検討することで、その「傾向」を把握することにした。
- 6) 印章集成の第3巻（Pärpola, A., B. M. Pande and P. Koskikallio (eds.) 2010 *Corpus of Indus Seals and Inscriptions. 3. 1. Supplement to Mohenjo-daro and Harappa (Vol. 3: New material, untraced objects, and collections outside India and Pakistan. Part 1: Mohenjo-daro and Harappa). Suomalaisen Tiedeakatemia Toimituksia Annales Academiae Scientiarum Fennicae Humaniora (AASF Hum) 359. Helsinki, Suomalaisen Tiedeakatemia*）が、2010年に公開された。内容は、モヘンジョダロ遺跡とハラッパー遺跡の未公表資料や新資料を集成したものである。今後、これらの新資料を分析対象に加える必要がある。ただし、上記2遺跡以外の資料数に変化はなく、第3巻掲載のインダス式印章の多くは第1・2巻と同様に左向きの一角獣を主モチーフとしている。
- 7) 分析資料のカウント方法であるが、報告済みのインダス式印章の写真または実測図を次の基準で判断しカウントした。モチーフに関しては写真または実測図でモチーフを明確に確認できるものだけをカウントし、分類名称は基本的に（Joshi and Pärpola 1987; Shah and Pärpola 1991）に従った。ただし、（Joshi and Pärpola 1987; Shah and Pärpola 1991）において、例えば一角獣とされている資料でもモチーフが明確でない場合は分析資料から除外した。サイズ計測のための分析資料に関しては、縦横長が明確な資料のみをカウントしている。一辺でも計測が不可能な場合は、分析資料から除外した。モチーフの向きに関しては、モチーフの向きが明確な資料のみを対象とした。この場合、サイズの計測が不可能であっても、モチーフとその向きが明確な場合は分析資料としてカウントしてある。また、拙稿（小茄子川 2007）の分析資料数は本論の分析資料数と異なっている。これは、新資料の増加とカウント・分類方法の違いに起因している。今後は、本論で採用した方法に基づいて議論を展開することにした。ただし、分析資料数は異なるものの、拙稿で導き出した「傾向」とそれに基づき提示した見解に変更はない。
- 8) 主モチーフ以外の印面を構成するモチーフとしては、一角獣の前方に配される「スタンダード（standard）」や短角のウシの前方に配される「まぐさ桶（manger）」と呼称されるモチーフがある。印面を構成するデザインを検討する場合、これらのモチーフも重要な意味をもつと考えられる。機会を改めて、詳細に検討する必要がある。

- 9) インダス文字に関する邦文文献としては、(小泉 2003) が詳しい。
- 10) つまみ (鈕) の詳細な検討と分類は、野口雅史の研究 (2002, 2003, 2005) を参考していただきたい。ただし、筆者は、氏が提示した鈕の型式学変遷についてはコンテキストが明らかな資料の蓄積を待ち、再検討を要するものと考えている。
- 11) 小磯・小茄子川 2009 では、特大型・大型・中型・小型の4つのカテゴリに区分した。この四区分でインダス式印章のサイズを分類すると、全てのモチーフを共通のカテゴリに基づき整理することが可能である。詳細は、(小磯・小茄子川 2009) を参照されたい。
- 12) モヘンジョダロ遺跡から、破損しているものの一辺 50.5mm を図るコブウシのモチーフが刻まれたインダス式印章 (Joshi and Parpola 1987: M-256) が報告されている。破損部分を一辺の長さから復元すれば、この印章が一角獣以外のモチーフが刻まれた印章の中で唯一特大型のカテゴリに属する印章である。モチーフごとのサイズとカテゴリの詳細は、(小磯・小茄子川 2009) に掲載のグラフを参照していただきたい。
- 13) インダス文明圏外から出土したインダス式印章は、今回の分析資料数にはカウントしていない。ただし、モチーフの向きに関しては適宜言及していくことにする。パルポラを中心として現在作成中であると聞く印章集成本の続刊の刊行を待ち、追って詳細な検討を加えることをお約束する。
- 14) 本論では、(Joshi and Parpola 1987; Shah and Parpola 1991) に掲載の写真に基づき、インダス式印章 (i) に由来すると考えられる印影を留める遺物 (封泥または護符) のみをカウントした。印影の報告数は少なく、(Parpola, Pande and Koskikallio 2010) においても同様である。筆者は、2010 年度のファルマーナー遺跡発掘調査において出土したインダス式印章の封泥を実見・実測する機会を得たことから、印章の印影を留める遺物に関しては機会を改めて検討してみたいと思う。
- 15) 氏のデザインシステムという用語は、土器装飾を規制する法則を意味する。本論における考究対象は土器装飾ではなく、印章上に表現されたデザインである。しかし、デザインを規制する法則性を意味する用語として、デザインシステムという用語は非常に便利かつ効率的であると考ええる。用語の使用法についての誤解を招くことを恐れず、本論でもデザインシステムという用語を使用する。
- 16) 土器彩文から印章モチーフへの特定シンボルの取捨選択という事象は、ウバイド期からウルク期にかけても認めることができるという (Thuesen 1992)。小泉龍人先生から本文献をご教授いただいた。インダス流域とメソポタミア地域における都市社会の成立期に、同様なシステムのシンボル体系の組み替えを観察できることは非常に興味深い。
- 17) インダス文字の詳細に関しては、その配列パターンや出現頻度などを総合的に検討する必要がある。機会を改めて、検討する必要がある。本論では、ガッガル川流域で出土する右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章が「樹木」・「槍」・「魚」・「列点」形のインダス文字を共有する頻度が高いという事実を指摘するに留めておきたい。
- 18) メソポタミア地方のテロー (Tello) 遺跡、ニップール (Nippur) 遺跡、キシウ (Kish) 遺跡、イラク内 (出土遺跡不明)、ペルシャ湾岸のファイラカ島のテル・サード (Tell Saad) F6 遺跡、オマーン地方のラス・アル＝ジュネーズ (Rs's al-Junayz) 遺跡とトルクメニスタンのアルティン＝デベ (Altyn Depe) 遺跡、ゴスノール・デベ遺跡からインダス式印章またはその可能性が高い方形印章の出土が報告されている。出土総数は、合計で 14 点と少ない。モチーフに関しては、そのほとんどが短角のウシであることが

確認されている (Vidale 2005; 小磯 2005)。インダス式印章の印影を留める遺物 (封泥や押捺痕) に関しては、メソポタミア地方のウンマ (Umma) 遺跡とイランのテペ・ヤヒヤー (Tepe Yahya) 遺跡からそれぞれ 1 点ずつ報告されている。図や写真が非常に不鮮明であるが、モチーフの向きを確認できる資料に関しては全て左を向く (陰刻) ことを確認できる。また、インダス式印章との関連が指摘されるペルシャ湾式印章やディルムン (Dilmun) 式印章 (Al-Sindi 1999; Kjærum 1983, 1994 など) に関しては、機会を改めて検討することにした。拙稿 (小茄子川 2007) では、両タイプの印章をインダス式印章の編年的位置づけを考察するために比較の観点から検討した。また、(後藤 1997, 1999) においても検討・言及されている。

- 19) 右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章の編年的位置づけ (上杉 2009; 小茄子川 2007 など) の詳細は、コンテキストの明確な資料の増加を俟ち、検討する必要がある。
- 20) インダス文明期の編年に関しては、(上杉・小茄子川 2008) で検討したハラッパー式彩文土器の彩文変化に基づいた四段階区分 (成立・古・中・新段階) に従う。今後の資料の増加を待ち、より詳細な編年構築作業が求められていることは言うまでもない。今後の最重要課題である。
- 21) 本論におけるクッリ文化 (Kulli Culture) およびクッリ式土器 (Kulli Ware) の編年的位置づけに関しては、(Shudai et al. 2010) に従う。近藤ほか 2007 においては、クッリ文化の盛期をハラッパー式土器中～新段階併行期として理解した。クッリ文化の盛期に関する理解に変更はないが、Shudai et al. 2010 ではクッリ式土器の成立期をハラッパー式土器古段階に遡るものとして理解している。
- 22) 本論におけるイデオロギーについては、一般的な辞書類 (広辞苑など) に提示される程度の意味で使用する。イデオロギーとは、「社会集団や社会的立場 (国家・階級など) において思想・行動や生活の仕方を根底的に制約している観念・信条の体系。歴史的・社会的立場を反映した思想・意識の体系。観念形態」として定義される用語である。インダス文明社会の根底に存在するはずのイデオロギーの詳細は、彩文土器とインダス式印章などに表される「原始絵画」とも言うべき資料群の検討から別稿で論じる予定である。

参考文献

- Al-Sindi, Kh. M. (M. A. Al-Khozai tr.) 1999 *Dilmun Seals*. Bahrain, Ministry of Cabinet Affairs and Information, Bahrain National Museum.
- Besenal, R. 1994 The 1992-1993 Field-Seasons at Miri Qalat: New Contributions to the Chronology of Protohistoric Settlement in Pakistan Makran. In A. Parpola and P. Koskikallio (eds.), *South Asian Archaeology 1993* (Annales Academiae Scientiarum Fennicae B 271), Vol. I, 81-92. Helsinki.
- Besenal, R. and P. Sanlaville 1990 Cartography of Ancient Settlements in Central Southern Pakistani Makran: New Data. *Mesopotamia* 25: 79-146, Pl. XII-XVII.
- Dales, G. F. and J. M. Kenoyer 1986 *Excavation at Mohenjo Daro, Pakistan: The Pottery*. University Museum Monograph 53, Philadelphia.
- Dangi, V. 2009 Archaeology of the Ghaggar Basin: Settlement Archaeology of Mehram Block, Rohtak, Haryana, India. In Osada, T. and A. Uesugi (eds.), *Occasional Paper 8: Linguistics, Archaeology and the Human Past*, 1-111. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.
- Fairservis, Jr. W. A. 1986 Cattle and the Harappan Chiefdoms of the Indus Valley. *Expedition* 28(2): 43-50.
- Farmer, S., R. Sproat and M. Witzel 2004 The Collapse of the Indus-Script

- Thesis: The Myth of a Literate Harappan Civilization. *Electronic Journal of Vedic Studies (EJVS)* 11(2): 19-57.
- Francofort, H. P. (ed.). 1989 *Fouilles De Shortughai: Recherches Sur L'Asie Centrale Protohistorique*. Mémoires De La Mission Archéologique Française En Asie Centrale. 2 vols. Paris, Diffusion De Boccard.
- Franke-Vogt, U. 1991 *Die Glyptik aus Mohenjo Daro: Uniformität und Variabilität in der Induskultur: Untersuchungen zur Typologie, Ikonographie und räumlichen Verteilung. I: Text und Tabellen; II: Appendices und Tafeln*. Baghdader Forschungen 13, Mainz, Verlag Philipp von Zabern.
- Joshi, J. P. and A. Parpola (eds.) 1987 *Corpus of Indus Seals and Inscriptions: 1. Collections in India*. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Kenoyer, J. M. 1991 The Indus Valley Tradition of Pakistan and Western India. *Journal of World Prehistory* 5(4): 331-385.
- Kenoyer, J. M. 2000 Wealth and Socioeconomic Hierarchies of the Indus Valley Civilization. In Richards, J. and M. V. Buren (eds.), *Order, legitimacy and wealth in ancient states*, 88-109. Cambridge University Press.
- Kenoyer, J. M. 2001 Early Developments of Art, Symbol, and Technology in the Indus Valley Tradition. *Indo-Kōkō-Kenkyū* 22: 1-18. Kanagawa.
- Kjærum, P. 1983 *Failaka/Dilmun the Second Millennium Settlements Vol. 1: The Stamp and Cylinder Seals*. Aarhus, Jysk Archaeologisk Selskab.
- Kjærum, P. 1994 Stamp-Seals, Seal Impressions and seal Blanks. In F. Højlund and H. H. Anderson (ed.), *Qala'at al Bahrain Vol. 1: The Northern City Wall and the Islamic Fortress*, 319-351. Aarhus, Jutland Archaeological Society.
- Kharakwal, J. S., Y. S. Rawat and T. Osada 2008 Preliminary observations on the excavation at Kanmer, Kachchh, India 2006-2007. In Osada, T. and A. Uesugi (eds.), *Occasional Paper 5: Linguistics, Archaeology and the Human Past*, 5-23. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.
- Kristiansen, K. 2004 Institutions and Material Culture: Towards an Intercontextual Archaeology. In DeMarrais, E., C. Gosden. and C. Renfrew (eds.), *Rethinking materiality the engagement of mind with the material world*, 179-193. UK, McDonald Institute for Archaeological research.
- Kristiansen, K. 2005 Innovation and Invention-Independent Event or Historical Process?. In C. Renfrew. and P. Bhan (eds.), *Archaeology: The Key Concepts*, 151-155. London/New York, Routledge.
- Kristiansen, K. and T. B. Larsson 2005 *The Rise of Bronze Age Society: Travels, Transmissions and Transformations*. Cambridge University Press.
- Kumar, M. and Dangi, V. 2007 A Harappan seal from Bhirrana. In Kumar, M (ed.), *Numismatic Studies* 8: 135-136. New Delhi, Harman Publishing House.
- Mackay, E. J. H. 1938 *Further Excavations at Mohenjo Daro*. Government of India Press.
- Mackay, E. J. H. 1943 *Chanhu-Daro Excavations, 1935-36*. Museum of Fine Arts. American Oriental Series, 20. Boston.
- Mahadevan, I. 1977 *The Indus Script: Text, Concordances and Tablets*. Memoirs of the Archaeological Survey of India 77.
- Mallah, Q. H. 2008 Recent Archaeological Discoveries in Sindh, Pakistan. In Osada, T. and A. Uesugi (eds.), *Occasional Paper 3: Linguistics, Archaeology and the Human Past*, 27-75. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.
- Marshall, J. 1931 *Mohenjo-Daro and the Indus Civilization*. London, Arthur Probsthain.
- Olijdam, E. and R. H. Spoor (eds.) 2008 *Intercultural Relations Between South and Southeast Asia: Studies in Commemoration of E. C. L. During Caspers (1934-1996)*. BAR International Series, Oxford, Archaeopress.
- Parpola, A. 1986 The Size and Quality of the Indus Seals and Other Clues to the Royal Titles of the Harappans. *Tamil Civilization* 4: 144-156.
- Parpola, A. 1994 *Deciphering the Indus Script*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Rao, S. R. 1982 *The Decipherment of the Indus Script*. Bombay, Asia Publishing.
- Rao, L. S., N. B. Sahu, P. Sahu, U. A. Shastri and S. Diwan 2004 Understanding Harappan Settlement at Bhirrana (2003-04). *Puratattva* 34: 20-24. New Delhi, Indian Archaeological Society.
- Rao, L. S., N. B. Sahu, P. Sahu, S. Diwan and U. A. Shastri 2005 New Light on the Excavation of Harappan Settlement at Bhirrana. *Puratattva* 35: 60-69. New Delhi, Indian Archaeological Society.
- Rao, L. S., N. B. Sahu, U. A. Shastri, P. Sahu and S. Diwan 2006 Bhirrana Excavation-2005-06. *Puratattva* 36: 45-49. New Delhi, Indian Archaeological Society.
- Rissman, P. C. 1989 The Organization of Seal Production in the Harappan Civilization. In Kenoyer, J. M (ed.), *Old Problems and New Perspectives in South Asian Archaeology (Wisconsin Archaeological Reports 2)*, 159-170. Madison.
- Sarianidi, W. I. 2006 *Gonur-depe: City of Kings and Gods*. Asgabat, Miras.
- Shah, S. G. M. and A. Parpola (eds.) 1991 *Corpus of Indus Seals and Inscriptions: 2. Collections in Pakistan*. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Shinde, V., T. Osada, M. M. Sharma, A. Uesugi, T. Uno, H. Maemoku, P. Shirvalkar, Shweta, S. Deshpande, A. Kulkarni, A. Sarkar, A. Reddy, V. Rao and V. Dangi 2008a Explorations in the Ghaggar Basin and Excavation at Girawad, Farmana (Rohtak District) and Mitathat (Bhiwani District), Haryana, India. In Osada, T. and A. Uesugi (eds.), *Occasional Paper 3: Linguistics, Archaeology and the Human Past*, 77-158. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature (RIHN).
- Shinde, V., T. Osada, A. Uesugi and M. Kumar. 2008b A Report on Excavations at Farmana 2007-08. In Osada, T. and A. Uesugi (eds.), *Occasional Paper 6: Linguistics, Archaeology and the Human Past*, 1-116. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature (RIHN).
- Suzuki, K. 1970 Design System in Later Jomon Pottery. *Journal of Anthropological Society of Nippon* 78(1): 38-49. The Anthropological Society of Nippon.
- Shudai, H., A. Konasukawa, H. Endo and S. Kimura 2009 Report on the Survey of the Archaeological Materials of Prehistoric Pakistan stored in Aichi Prefectural Ceramic Museum. Part 1: Painted Pottery of Nal Ware. *The Bulletin of the Tsurumi University: Studies in Humanities, Social and Natural Sciences* 46(4): 75-108. Yokohama.
- Shudai, H., A. Konasukawa, H. Endo, S. Kimura and T. Ueno 2010 Report on the Survey of the Archaeological Materials of Prehistoric Pakistan stored in Aichi Prefectural Ceramic Museum. Part 2: Kulli Ware. *The Bulletin of Tsurumi University: Studies in Humanities, Social and Natural Sciences* 47(4): 53-115. Yokohama.
- Thuesen, I. 1992 Information Exchange in the 'Ubaid Period in Mesopotamia and Syria. In D. Charpin and F. Joannès (eds.), *La Circulation Des Biens, Des Personnes Et Des Idées Dans Le Proche-Orient Ancien (Actes de la XXXVIII^e Rencontre Assyriologique Internationale)*, 13-19. Paris, Editions Recherche sur les Civilisations.
- Urmila, S., T. J. Baidya, N. G. Nikoshey, N. K. Sharma, S. Nayan, J. K.

- Tiwari and A. Arif 2005 Bagor-A New Harappan Site in Ghaggar Valley-A Preliminary Report. *Puratattva* 35: 50-59. New Delhi, Indian Archaeological Society.
- Vats, M. S. 1940 *Excavations at Harappa*. Delhi, Government of India Press.
- Vidale, M. 2005 The Short-Horned Bull on the Indus Seals: A Symbol of the Families in the Western Trade? In U. Franke-Vogt & H. - J. Weisshaar (eds.), *South Asian Archaeology 2003*, 147-158. Aachen, Linden Soft Verlag e. K.
- Wright, R. P. 2010 *The Ancient Indus: Urbanism, Economy, and Society (Case Studies in Early Societies)*. Cambridge University Press.
- Zide, A. R. K. and K. V. Zvelebil 1976 *The Soviet Decipherment of the Indus Valley Script: Translation and Critique*. Mouton, The Hague.
- NHK・NHK プロモーション編 2000『世界四大文明 インダス文明展』NHK・NHK プロモーション。
- 上杉彰紀 2008「インダス・プロジェクトによるインダス遺跡の発掘調査」『環境変化とインダス文明 2007年度成果報告書』83-114頁 総合地球環境学研究所 インダス・プロジェクト。
- 上杉彰紀 2009「ガッガル平原における先・原始文化の変遷」『環境変化とインダス文明 2008年度成果報告書』75-102頁 総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト。
- 上杉彰紀 2010『インダス考古学の展望：インダス文明関連発掘調査遺跡集成』総合地球環境学研究所 インダス・プロジェクト。
- 上杉彰紀・小茄子川歩 2008「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察 -土器編年を手掛かりとして-」『西アジア考古学』9号 101-118頁。
- 柄谷行人 2010『世界史の構造』岩波書店。
- 木村 聡 2009「ソーラト・ハラッパー文化小考」『インド考古研究』30 63-76頁。
- 小泉龍人 2001『都市誕生の考古学』同成社。
- 小泉龍人 2003「インダス文明の文字」菊池徹夫(編)『文字の考古学Ⅰ』155-219頁 同成社。
- 小磯 学 1998「『都市』のかたちに見るインダス文明の地域性」『網干善教先生古希記念論文集』1511-1532頁 網干善教先生古希記念論文集刊行会。
- 小磯 学 2002「インダス文明における動物表現一瞥書き」『日々の考古学 東海大学考古学教室開設20周年記念論文集』393-408頁 東海大学考古学研究室。
- 小磯 学 2005「インダス文明の交易活動における印章」『西アジア考古学』6号 67-86頁。
- 小磯 学・小茄子川歩 2009「インダス式印章のサイズとその意義」『日々の考古学2』397-418頁 東海大学考古学研究室。
- 後藤 健 1997「アラビア湾岸における古代文明の成立」『東京国立博物館紀要』32号 15-144頁。
- 後藤 健 1999「遺物の中の異物 -インダス文明の遺物から」『考古学雑誌』84巻4号 70-88頁。
- 小茄子川歩 2007「インダス式印章のデザインシステム -印面に刻まれた図像の構造と変遷を手掛かりとして-」『東海史学』41号 67-89頁。
- 小茄子川歩 2008a「ナール式土器とその意義 -岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて-」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』22号 29-55頁。
- 小茄子川歩 2008b「都市と伝統の創出 -彩文土器の変容からみたインダス文明の成立と展開-」『考古学研究』55巻1号 61-81頁。
- 小茄子川歩 2008c「コート・ディジー式土器とハラッパー式土器 -ハラッパー式土器の起源に関する一考察-」『古代文化』60巻2号 70-83頁。
- 小茄子川歩 2009「インド考古学通信(2)」『古代文化』61巻4号。
- 小茄子川歩 2010a「ファイズ・ムハンマド式土器とその意義 -岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて-」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第24号 43-82頁。
- 小茄子川歩 2010b「インド考古学通信(3)」『古代文化』62巻1号。
- 近藤英夫 2004「インダス文明の最近の理解 -都市類型に注目して-」『古代インドの都市像を探る』103-108頁 国際シンポジウム「古代インドの都市像を探る」実行委員会。
- 近藤英夫 2006「インダス文明の信仰体系」『東海史学』40号 41-54頁。
- 近藤英夫・上杉彰紀・小茄子川歩 2007「クッリ式土器とその意義 -岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて-」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』21号 15-50頁。
- 嶋田義仁 1995『牧畜イスラーム国家の人類学 -サヴァンナの富と権力と救済』世界思想ゼミナール 世界思想社。
- 嶋田義仁 2010『黒アフリカ・イスラーム文明論』創生社。
- 嶋田義仁・松田素二・和崎春日(編) 2001『アフリカの都市的社會』世界思想ゼミナール 世界思想社。
- 須藤寛史 2006「西アジア銅石器時代における円筒印章の「発明」」『国士館考古学』2号 23-36頁。
- 野口雅央 2002「インダス文明における印章研究の新視点」平成13年度東海大学文学部歴史学科考古学専攻卒業論文(未刊)。
- 野口雅央 2003「インダス文明における印章研究の新視点」『インド考古研究』24号 54-75頁。
- 野口雅央 2005「モヘンジョ・ダロにおける印章型式変遷の検証と考察」平成16年度東海大学大学院文学研究科修士論文(未刊)。

小茄子川歩

デカン大学院大学考古学学科博士課程

Ayumu KONASUKAWA

Deccan College, Post-Graduate & Research Institute,

Deemed University